

Index (指標記号) としての Expletive (虚字) の *it*

The Expletive *it* as Index

梅本 孝

いわゆる虚字の *it* についての考察である。最初に Krusinga, Jespersen, Swan などの先行研究を振り返り、Syntax における研究も概観したうえで、主として、記号論的観点から言語を見直し、その文脈のなかで虚字の *it* を捉え直して見ようと試みた。

前提として以下のように考えた。

- 1: 言語はある音声形式 (とかなりの場合書記形式も) でなりたつと
言う点に於いて一種の記号体系 (system of sign) だと考える。
- 2: 言語内で構成素を成すとかんがえられるものはすべてある音声形
式と意味形式を担った記号である。
- 3: その言語記号は (Peirce 1931—58, 1940) に基づいて3つのカテ
ゴリー (icon, index, symbol) に分けることができる。
そのうちで虚字は index にあたると考えた。理由を3つ考える。

- 1) 他のヨーロッパ言語で虚字だと考えられるものはすべて、近接性
に基づくと考えられる直示的 (deictic) なことばである。
- 2) 虚字に意味があるのかないのかという議論は虚字が index だと
考えることによって、大部分解決する。
- 3) 虚字の *it* が漠然としたその場の状況を表わしたり、*that* clause
や *to* 不定詞を表わしたりすることも *it* を index だと考えること
によって説明ができる。

キーワード: 類似記号、指標記号、象徴記号、虚字、ダイクシス

0. イントロダクション

生成文法において議論される一方の虚字の *there* にくらべてもう一方の虚字の *it* はたいして議論されてこなかったように見える。*there* についてはたとえばぎのものが詳しい (e. g. Milsark 1974 ; Safir 1982 ;

Williams 1984 ; Lasnik 1989, 1993 ; Belletti 1988)。Chomsky (1994) も expletive のところではどういうわけだかほとんど *there* しか扱っていない。Postal and Pullum (1988) や Authier (1991) や Rothstein (1995) は *it* を中心課題としてとりあげていると言う点においてかなり例外的だと言えよう。

この論文ではやや記号論的な観点から虚字の *it* が考えられないかという可能性を探りたいと思う。結論を先取りしていえば、虚字の *it* は Peirce (1931—1935) のいう icon (類似記号)、index (指標記号)、symbol (象徴記号) の内、指標記号に属するということを主張したい。

またこの論文ではどちらかという主語にたつ *it* にやや重点を置いて扱うつもりである。

1. 簡単な先行研究

ひとたび *it* の扱いをみるのを始めるとあまりの用語不統一と説明の不一致のためにすぐに迷路のなかに迷い込んでしまう。ここではごく簡単に Kruisinga (1909—11)、Jespersen (1909—49)、Swan (1980) をみることにする。

1.1 Kruisinga (Handbook (1909—11) Vol. 3, §§ 999, 1002, 1003, 2077 etc.)

Kruisinga の分類の仕方では同じレベルではないかもしれないが、*it* を一応 anticipatory *it* と formal *it* に分けることを暗示している^{註1}。しかしこの2つの *it* の境界は Kruisinga 自身が認めているように、実のところまったくはりしない。かつ述べられている箇所が違っていると用語の使い方のずれがみられるようである。(1 a) から (1 d) は Kruisinga の anticipatory *it* の例。

注1 Cf. Zandvoort (1975 : 136) の formal subject は impersonal *it* のこと。

- (1) a. Ah! it was worth while, this battle (§ 1000)
b. It was unfortunate, her choosing of that phrase. (§ 2419)
c. It must have been very pleasant, staying at the Hall. (§ 2419)
d. It was all ranged upon a slope, was this old garden. (§ 430)
c. f. e. He hated being “messed about,” did Gerald. (§ 430)

この例では Kruisinga のいう appended subject あるいは appended statement を伴う文中に *it* が起っていることに注目する必要があるように思われる。

また、それ以上に注目すべきことは彼自身が anticipatory *it* と formal *it* とをはっきり区別できないことを明言しているということである (§ 1002)。

(2)から(4)の例は anticipatory *it* と formal *it* とをはっきり区別できないことを明言しているセクションの次に載せられている例であり彼自身が anticipatory *it* か formal *it* かきめかねていると考えられる例である。そしてこのような場合には provisional *it* とよばれるのが普通であるとも言っている。

- (2) It would be difficult to better this description. (§ 1003)
(3) It's nonsense thinking her so ill as that. (§ 1003)
(4) It is clear that you did not want to do the work. (§ 1003)

しかし他の巻に書かれていることとの整合性を考えると、Kruisinga は *it* を anticipatory *it* と formal *it* に分け、formal *it* をさらに impersonal (非人称) の *it* と provisional (暫定) の *it* に分け、そのうちの anticipatory *it* と provisional (暫定) の *it* の区別が難しい、と考えているようである (§ 2077)。

以下のタイプの if や when が導く節と関係をもつ *it* も provisional *it* と考えている。

- (5) Do you think the girls would consider it narrow if I asked them to stop that dancing and whooping?
- (6) Till the storm (viz. of coughing) had subsided and a new dose of the sedative had been given, Sally and old Jack stood waiting in sympathetic pain—you know what it is when you can do nothing.

彼は意味を持たない *it* というものを想定しそれを formal *it* と呼ぶ。彼の formal *it* は大きく分けて所謂 impersonal (非人称) の *it* と provisional (暫定) の *it* に分かれると考えられる (§ 2077)。

- (7) It snows.
- (8) It is eight o'clock.
- (9) It is hot, cold.
- (10) It is difficult to prevent this.
- (11) It is inconvenient arriving in London on Sunday.
- (12) It is my father that said so. (§ 922)

このうち(7)–(9)は impersonal (非人称) の *it*、(10)–(11)は provisional (暫定) の *it* と考えてよいだろう。また、所謂(12)のような強調構文で 사용되는 *it* も formal *it* として考えていることにも注意する価値がある (cf. § 1008)。

1.2 Jespersen (MEG 1909–49)

Kruisinga が(7)–(12)のような例文中の *it* には意味がないとし、Formal *it* と呼ぶのと反対に Jespersen は(7)–(9)のような *it* を unspecified *it*、あるいは conceptual *it* とし、意味があると考えている (Vol 7, § 4.6₉)。しかし MEG (Vol. 7, § 4.6₉) ではこれらの *it* は何か定まったものに

言及しているといっているだけである。Jespersen (1924 : 241) ではこれらの *it* は神の概念を表わすということを暗示している。

Jespersen (1909—49) では *it* を4つのグループに分けている。すなわち。

- (A) Anaphoric *it* referring to something previously named :
- (B) Preparatory (anticipatory, or representative) *it* referring to something that follows ;
- (C) In cleft sentences : *it* is... ;
- (D) Unspecified *it* without any reference.

このうち虚字の *it* として問題となるのは通常、(A)を除いた残りの(B), (C), (D)である。Jespersen は(B)に関しては dummy subject といっているので意味はないと考えているようである。(B)の例。

- (13) It seems certain that he is dead. (§ Vol. 7 ; 4. 6₄)
- (14) It occurred to me there was no time to lose.
- (15) It mattered little who filled the town.
- (16) Was it true what Mabel had said ?
- (17) It is no use her listening at keyholes.
- (18) It is a great pleasure to see you.
- (19) It is rather funny, you to be talking of power.
- (20) It is good for a man not to touch a woman.
- (21) It was perfectly horrible the way that people were being kept in the dark [=how people were...].
- (22) It was strictly academic, the way he used to come in.
- (23) It's extraordinary the different ways different people have of showing respect.

(C)の例。

(24) It is the wife that decides.

(25) It is the wife who decides.

(26) Who is it that cries?

(D)の例。

(27) The raine it rainth euery day.

(28) It had thundered during the day, and it promised more thunder.

(29) It is rather close in here.

(30) It wants only a few minutes to six.

(31) It is Friday today.

(32) It's a long way to Tipperary.

(33) It says in the Bible : Thou shalt not steal.

1.3 Swan (Practical English Usage 1980)

Swan (Practical English Usage 1980) では以下のような例の *it* を empty subject とし、意味が無いものと考えている。

(34) It's ten o'clock.

(35) It's Monday.

(36) It rained for three days.

(37) It can be very warm in September.

(38) It's three miles to the nearest garage^{注2}.

以下のような例は preparatory subject と考えている。

(39) It's difficult to remember all their names.

注2 Cf. Curme (1931, p. 7) では距離の *it* は situation *it* とみなす。

- (40) It wasn't very clear what she meant.
(41) It's not much good expecting Andrew to help.
(42) It will be a pity if we have to ask her to leave, but it looks as though we may have to.
(43) It was Mrs Smith who came on Tuesday.

以下のような例の *it* は the present situation と考えられている^{注3}。

- (44) It's awful! —I've got so much work I don't know where to start.
(45) Isn't it lovely here!

1.4 先行研究の簡単なまとめ

結局のところ、他の3人称の代名詞と大体同じ使い方をする anaphoric の用法を別にする *it* は大きく2つに分けることができると思われる。

a—うしろのものを指す。うしろのものは名詞(句)、*that clause, to do, doing* などいろいろ。いわゆる cataphoric な用法^{注4}。

Jespersen の preparatory *it*、Curme の anticipatory *it*、Kruisinga (Handbook, Vol. 3, § 1003) の provisional *it*、Zandvoort (1975: 135) の provisional subject Bryant 1945, §§ 160, 280) の expletive *it*、Quirk et al (1985) の anticipatory pronoun、Swan の preparatory subject がこれに当たるであろう。

b—漠然としたその場の状況を指す。Curme の situation *it* の一部、Swan の the present situation、などがこれにある程度当たる。

注3 Curme の situation *it* に非常に近いとかがえられる。

注4 Kruisinga はこの *it* の用法を deictic としている。

b'——天候、時間、距離などをあらわす。Jespersen の unspecified *it*、Swan の empty subject、Zandvoort の formal subject、Quirk et al の prop subject がこれに当たるだろう。

b と *b'* をはっきり分けて扱っているのは Swan だけのようである。わたしは差し当たり *b* と *b'* を分ける特別な理由が見当たらないので、分けることはしない。*b* と *b'* はどちらも対等に (通常使われる意味での) deictic な表現形式であると考ええる。

そして *a* と *b* の差がはっきりしない例がありえる。

(46) It looks as if we're going to have trouble with Mrs Jenkins again.

この *it* はその場の状況を指しているものであろうか、それとも *it* 以下を指しているものであろうか。この例は Swan (1980: 350) からのものであるが、彼はこの *it* を preparatory subject として扱っているのだが、*it* と *as if* 以下が絶望的に交代不可能であることなどを考えると、むしろ、*a* より *b* に近いのではないかとさえ思われる^{注5}。

あとは虚字の *it* に意味があるとする立場とないとする立場に大きく分かれると考えられる。Quirk et al (1985) ではそのことについて極めて曖昧な述べ方をしており、明確には述べられていない。

2. Syntax に於ける研究

統語論において虚字の研究は比較的重要視されているようにみえるが、先に述べたようにその研究は *there* (e. g. Milsark 1974; Safir 1982; Williams 1984; Lasnik 1989, 1993; Belletti 1988) に傾いているようにおもえる。虚字の *there* を扱うばあいには結局 NPにどうやって格を与え

注5 Quirk et al (1985: 147) も *it seems that* の *it* はどちらかといえば anticipatory *it* と考えているようである。

るかと言う問題になっているように思う。*there* と NP とのあいだに CHAIN (大連鎖) を設定したり、*be* 動詞が直接 NP に格を与えていると考えたり、*base generate* されるとも考えられると思うが *there* の研究はここでは触れない。最近の Chomsky (1995: 286—89, 340—48) も虚字のところではほとんど *there* だけを扱っていて *it* はどう言うわけだがあまり扱っていない。

現在のところまででは虚字の *it* に関して問題となっていることは大体以下の一点に収斂していくものとかんがえられる。即ち、まず大前提として、虚字の名詞句はそもそもそれ自体が意味を持たないと考えているので、D構造で θ 役割 (θ -role, 意味役割) が与えられる θ -marked position には起こってはいけない。つまり、虚字の名詞句は strictly subcategorized position (動詞の直接目的語の位置) には起こらないと考えられる^{注6}。

しかしそれに抵触すると考えられる例がすぐに見つかってしまう。たとえば次の例である。

(47) I believe it to be obvious that he has lost.

こういった *it* を考える際に考えられる方向性は次の3点ぐらいにしぼられることになる。

1——そもそも前提が間違っているのもあって、strictly subcategorized position に虚字の *it* が起こっても良いのだとする立場。これは Postal and Pullum (1988) の立場だとかんがえられる。しかしそうすると Chomsky (1981) が主張している Projection Principle (この場合は主要部 (例えば動詞) が厳密下位範疇化する位置はすべてその主要部によって θ

注6 ということは逆にいうと主語位置に出る虚字の *it* に関しては何も問題がないということになり、確かに管見によれば、主語位置の虚字の *it* を改めて問直す様な研究はみかけないように思う。

標示されなくてはいけない)を否定することになる。尤も、最も新しい枠組みである minimalist program では projection principle は否定されているらしい。

2—実はこの *it* は表面上は *believe* の目的語に見えるのだが、本当は *believe* 以下は一種の clause を成して *it* は実はその clause の主語になっているから何の問題もないのだとする立場。Chomsky (1986 : 91 ff.), Haegeman (1994 : 60 ff.) もそう考えているようである。つまり以下の文において(47)の分析として(48)ではなく(49)を採用するということになる。

(48) I believe it [_st to be obvious that he lost].

(49) I believe [_s it to be obvious that he lost].

しかしそうすると(50)から(52)の事実を説明できなくなってしまう。

(50) They mentioned it immediately to the candidate that the job was...

(51) *They mentioned immediately it to the candidate that the job was...

(52) They mentioned (*immediately) that.

mention は ditransitive verb なので *to the candidate* は *mention* が選択要求している項のはずである。[*it that the job was...*] が clause として構成素を成すと考えるとその中に *to the candidate* があるのはまずい。*it* が動詞の目的語になっていると考えれば(51)、(52)も説明できる。

3—動詞の目的語の位置に起こる *it* は実は虚字の *it* ではなくて普通の代名詞の *it* であるとする立場。Rothstein がこの立場だといえるだろう。

(53) They never mentioned (it) to the candidate that the job was poorly paid (Rothstein 1995)

そうするとこの代名詞であるところの *it* はいったい何に言及していることになるのであろうか。

そしてそもそも *clause* としての分析が初めからできないような例は一体どうやって扱うのだろうか。例えば次のような例。

- 64) queen *it*.
- 65) bus *it*.
- 66) wing *it*.
- 67) Do you like *it* here, Takashi?

3. Semantics に於ける研究

semantics に於いて虚字の *it* を中心課題として扱った研究は管見ではドイツ語の虚字だと考えられる *es* を扱った Smith (1996) ぐらいしか見当たらない。そもそも虚字の *it* には意味がないのだとすれば、意味論の考察対象にならないのは当然だと考えることもできるので、意味論で扱われないのはそういった意味で当然だということもなりたつかも知れない。

Langacker(1995: 46) にほんの少し虚字に関する言及があり、それによると *it* と *there* は (participants に対じるものとしての) ABSTRACT SETTINGS であり、最小限度の可能な特定性で特徴付けられるとしている。さらにそれらは、そのなかに起こる要素に対する reference points (参照点) になっていると述べている。

4. Other Languages

他の言語についてはここでは詳しくは考察しない。しかしすくなくとも英語以外の所謂ヨーロッパ言語は孰れ考察する必要があるだろう。ここではほんの少しの例を挙げておく。

Italian

- 68 (*Cio) e chiaro che Louisa non partira.
(*It) is clear that Louisa not leave (fut, 3 sg)

French

- 69 Il fait chaud (froid).
60 Il est difficile de traduire ce texte. 口語では *c'est* を用いる傾向がある。
61 Je trouve bizarre qu'elle soit la.
62 *Est etrange qu'elle soit la.

German

- 63 Es freut mich, dass du gesund bist.
64 Alle wussten (es), dass ein Unrecht geschehen war.

いずれも直示的 (deictic) なことばが使われていることに注目されたい。

5. Semiology (Semiotics) の観点から

統語論では Chomsky (1995) において経済性との関連で虚字を捉えようとする試みがなされているようである。しかし経済性の観点から言えることは、いくつかの選択肢があった場合に経済性の点で優れているということで *it insertion* が選ばれるということに過ぎないようにもみえる。これでは虚字のレーゾン・エートルに関しては何も述べられていないに等しいし、虚字そのものもつ意義については無視することになる。もちろん初めから (その言葉自信が示すように) 虚字の *it* には何の意味も意義もないと考えているのであれば *it* の意味を問うこと自体ありえないわけではあるが、私は自分の持つ言語感として表面上出てくる要素に対しては何らかの形で意味を担っているはずだ (あるいはもともと意味がほとんど無いと考えられる要素であっても一旦表面上に現われると人間はその要素に対して何らかの意味づけをしてしまうものだ) という意識を前提としてもっ

ているので *it* の存在意義それ自体を問うてみたいと思う。

また統語論以外に目を転じても Kruisinga, Jespersen, Curme などから Quirk et al に至るまで虚字の *it* に関してある程度でも納得できる見解が示されたかという点はどうもそうではない。そもそも *it* に意味があるのかどうか、もし意味があるとするとそれは一体どういう意味なのか、などに関しての説明は全く不十分である。いろいろな偉い学者が一生懸命に考えても良い説明が得られないと言うことは、今までの *it* の説明の角度自体に問題があったのではないかと考えられる。この論文では記号論的な角度からみて *it* をどのように扱えるのかということを考える。

5.1 前提

前提として以下のように考える。

- 1 : 言語はある音声形式（とかなりの場合書記形式も）でなりたつと言う点に於いて一種の記号体系 (system of sign) だと考える。
- 2 : 言語内で構成素を成すとかんがえられるものはすべてある音声形式と意味形式を担った記号である^{注7}。
- 3 : その言語記号は (Peirce 1931—58, 1940) に基づいて3つのカテゴリー (icon, index, symbol) に分けることができる。

5.2 考察：Peirce の3つのカテゴリーの考察

Peirce の3つのカテゴリーを言語外レベル、言語レベル、言語内レベルの順で考察する。言語レベルは言語外照応（あるいは外界指示（=現場指示））、言語内レベルは言語内照応（あるいは文脈指示）という指し示し方、あるいは、考え方にそれぞれある程度平行していると考えられる。言語外レベルではシニフィアン（ここでは単に表わしているものの意）とシニフ

注7 構成素を成していないと考えられる言語の部分はここでは無視する。

イエ (ここでは単に表わされているものの意) が共に言語外にあり言語内レベルではシニフィアンとシニフィエが共に言語内にあると考えられる。言語レベルではシニフィアンだけが言語内にあり、シニフィエは言語外にあると考えると考えやすいと思われる。

1. Icon (類似記号); 言語外での icon を考えると絵や写真が典型的な icon であろう。言語レベルで考えるならば擬声語、手話の一部を icon と考えることができるであろう (cf. Silverstein 1976: 28)。また言語内レベルで考えた場合、たとえば 'イヌ' というメタ言語をつかってイヌという単語を表す場合 'イヌ' はイヌに対して icon になっていると言いえる可能性がある。

2. Index (指標記号); 言語外での index を考えると風見、気圧計の水銀の高さ、矢印などが考えられるであろう。考えて見るとそれらはすべて近接性に基づいた記号であると考えることができる。風見は風と、気圧計の水銀の高さは気圧と、矢印はその矢印が指しているものと近接関係にあると考えることができる⁸。言語レベルで考えるならば手話の一部、deictic 表現 (e. g. *here, there, this, that*, や *he, she, it* などの一部の使い方 (cf. Clark 1996など) がそれにあたると考えられるだろう。言語内レベル (テキストレベル) で考えた場合には、後者、前者という意味での *this, that, the latter, the first*, や、「イヌと言う単語」と言うときの「単語」、つまり *the word*, 'イヌ' というときの *the word* などを指していると考えられるように思われる。

3. Symbol (象徴記号); symbol は表わすものと表わされるものとの間に類似性もしくは近接性による関係性を持たないような記号を指す。しか

注8 必ずしも物理的な近接関係でなくてもよい。心理的な近接関係でもよい。物理的な近接関係と心理的な近接関係の関係についてはここではふれない。

しよくよく考えて見ると、さしあたり言語を除くと、この人間社会に存在していると考えられる記号で何の類似性も何の近接性も持たないような記号を想定することはかなり難しい。そもそも人間社会に存在する記号はその記号を認識する人にとって何を意味するかわかりやすく作られているのが普通であって、わかりやすくつくるためには類似性か近接性（あるいはその両方）に基づいて作るほかにないように思う。わかりやすさを犠牲にしてまで symbol を作り出すということになればその犠牲を補っても十分にお釣がこななければいけない何らかの理由があるはずだと考えるのは当然である。大部分の記号は実際には類似性か近接性、あるいは、その両方に何らかの形で基づいていると考えるのが寧ろ自然である。言語以外で純粋な symbol だと考えられる可能性があるものを挙げると、数学の記号の一部が先ず考えられるかもしれない。ただ数学の記号にしてもたとえば $a > b$ は「 a は b より大きい」であってその逆にはなりにくいのは $>$ の記号が類似性に基づいているからであるというのは明らかであろう。また $a > b$ において $>$ が「より大きい」という意味を持つことができるのは a と b が $>$ に接近してあるからである。 a と b がなければ $>$ は広がっている方が左であるかどうかもわからない。 $>$ は矢印だと思うかもしれないし、広がっている方を上にして \vee のように考えてコップを表わしていると思うかもしれない。ほかに、言語以外で純粋な symbol の候補になる可能性があるのに日本十進分類コードがある。これは図書館でよく使われている図書分類整理用の番号である。たとえば300が社会科学を表わし、780がスポーツ・体育を表わす。この分類法において社会科学が200であって300でなくてはいけない理由はないように思われる。しかしこの分類法においても300という記号はその記号の近くに社会科学の本が並べられている状態になって初めて一般の社会生活上の意味のある記号となるのである。また社会科学を表わす300という記号を基にして310が政治、320が法律、330が経済を表わしたりする。そうすると300＝社会科学という次元には少し別の次元で310＝政治が発生していることになる。つまり310＝政治は300＝社会科学

との近接性に基づいて成り立っている（或いは、310は300台全体の中に含まれているのだと考えると容器のメタファーが係わりあり）記号であるということが言える。

言語のレベルでは特に Saussure 以降、symbol としての言語は言語記号の恣意性として折に触れ言及されてきた事柄である。単純に考えれば言語記号は音声形式と意味形式の2つから成り立っているが、言語記号は、その言語記号において結び付いている特定の音声形式（場合によっては書記形式も含めて）と特定の意味形式がお互いに結び付いていなければならない必然性はないということである^{注9}。イヌという言語記号が動物としての canine とむすびつかなければならない理由はない^{注10}。

言語内レベルで考えた場合はたとえば x なら x という任意の記号でイヌという記語記号を表わす場合 x は symbol であるといえるだろう。

5.3 index としての虚字の *it*

5.3.1 指示代名詞と人称代名詞との構造的平行性

注9 ここではソシュールの恣意性のもう一つの意味、あるいはもうひとつの捉え方——場面や状況が同じでも、言語によってその概念化のしかたが違う——については考えない。またソシュールは言語記号はすべて symbol と考えているようであるがこの論文では言語記号も他の記号と同じように icon, index, symbol の3つの特徴によって成り立っていると考える。しかし言語記号も含めてすべての記号について、まったくの純然たる icon, index, symbol というものは現実にはほとんど存在せず、ほとんどの記号はこれらの3つの記号の内のいくつか、あるいは全部が少しずつ組み合わさっているものと考え。且つ、この記号の組み合わせは静的なものではなくその時々々の場面にさえ応じて変化する dynamic な process であると考え。これは私の頭のなかでは、人間の自己の確立が dynamic な process であるという認識と平行している。

注10 音と意味が直接結び付いていると考える言霊の考え方は実は個人的には非常に魅力的な考え方を一部に含んでいる説だと思いがここでは勉強不足もあって無視する。

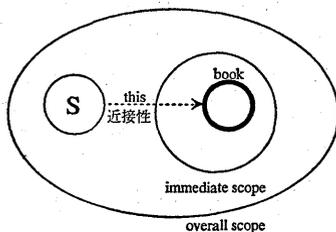
deictic (直示的) な使い方の *this*, *that* などが言語記号における index であるといわれることがある (e. g. Clark 1996)。それは deictic の *this* や *that* が近接性に基づく表現であること、つまりたとえば「*this* = (話者の近くにある) この本」(現場レベル) と言う関係に依る。

ところで deictic な使い方がされるのは何も指示代名詞の専売特許と言うわけではない。人称代名詞が deictic な使い方がされるときも勿論ある。また逆に指示代名詞が人称代名詞のような使い方がされることもある。指示代名詞色の強い *that* と人称代名詞色の強い *it* がしばしば交代可能であることなどを考慮するならば、ここで当然考えないといけないことは、指示代名詞の使い方と人称代名詞の使いかたのあいだになんらかの構造的平行性を考えなければならないのではないかということである。そこで構造的平行性を考える。

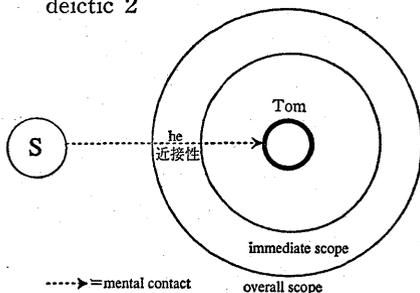
先ず deictic という言葉は大きく分けて2つの意味で(あるいは2つのレベルで) 解されるべきであるとの論文では想定する。

ひとつは話し手を中心とする現実の世界(あるいはそのように認識される世界)のレベルでの現場指示(=外界指示)の意味で、もう一つは、現場指示よりは話し手から切り離された(と考えられる)文脈指示(=言語内照応)である。それぞれを deictic 1, deictic 2 とし、差し当たり以下のように図示する(immediate scope, overall scope に関しては Langacker 1995: 9-12)を参照されたい)。

deictic 1



deictic 2



-----> = mental contact

⊙ = Speaker

deictic 1 で *this* や *that* で表わされる関係は話し手を中心とする近接性(物理的距離、心理的距離)に基づいた関係であり、deictic 2 で表わされる関係は人称代名詞 *he* と固有名詞 *Tom* との時間的な、もしくは、空間的な近接性に基づく関係であると考えられる。つまり、より具体的に言うと deictic 1 ではたとえば *this, that* で *this book, that book* を表わすわけで、ここでの *this* は話し手と *this book* との近接性に直接基づいて出てくることばであり、結局、話し手と話し手が表現したい物体、事態との物理的、心理的距離が問題となる。deictic 2 は言わば、deictic 1 のようには、直接に話し手を巻き込まない形で、*Tom* と *he* との時空間上の距離を問題としている。しかしながら、*Tom* と *he* との距離を認識、設定するのは話し手(または書き手)、あるいはそれに付け加えて、その発話(書記体)を認識する聞き手(または読み手)であろうから、まったく話し手が関与しないというわけではないはずである^{注11}。ただ関与のしかたが直接的、間接的という違いはあるようには思われる。直接的、間接的の中身については孰れ、もうすこし検討したい。

ところが deictic 1 と deictic 2 が構造的な平行性がある程度もつことから、一方の世界の表現が他方の世界の表現に入り込むと考えられることがある。

たとえば deictic 1 → deictic 2 を考えてみる。*this* や *that* は deictic 1 以外にたとえば次のような使い方ができる。

(6) My explanation is (like) this.

注11 話し手の関与については稿を改めて考え直すつもりである。話し手が文を発話する際に聞き手のことをどれだけ意識して発話しているのかということも今後1つの問題として考えてみたいと思う。deictic 2 の表現に関しては、私は個人的には、精神的に異常をきたしている様な人を除くと、ほとんど常に話し手は聞き手の存在を意識してはなしをしているのだと考える。独り言の場合もそうだと考える。

- (66) That was his idea.
- (67) We will confine ourselves to saying this, that the criticism which he has put forward is one which cannot be neglected. (Kruisinga 1932; § 1111) (Kruisinga によるとこの用法は *this* のみ)
- (68) I like that. Bob smashes up my car and then expects me to pay for the repairs. (小西 1988: 1748)

学校文法で習う前者、後者の意味で使う段階に至ってはほとんど完全に deictic 2 の段階に入り込んでいるといえるだろう。

- (69) Work and play are both necessary to health; this gives us rest, and that gives us energy. (小西 1988: 1748)

この場合(68)や(69)のような *that* の使い方には普通 anaphoric use だけしかないと考えられる。しかし *this* だけではなく(69)に示される通り *that* も anaphoric にも cataphoric にも使われ得ることに注意しなければならぬ。注12。

逆に deictic 2 → deictic 1 だと見える例を考えてみる。*he, she, it* などが以下のように使われた場合などがそのように見える。

- (70) There she is.
- (71) Here it is.

さらにいわゆる非人称の *it* や漠然とした状況を表わすとされている *it* も

注12 もっとも *that* よりも *this* の方がより自然に cataphoric に使えるということは留意しておくべきである。Cf. Quirk et al (1985: §§ 6, 44, 19, 47).

deictic 2 に発生し、それが deictic 1 に入り込んだ表現形式になっているように一見思われる。

しかし人称代名詞のなかでも *I* はもちろん *you* も普通の使い方としては deictic 1 の世界で使われるのが基本的であろうことはどうしても否定できないことのように思われる (cf. Wales 1996 : 50 ; Halliday and Hasan 1976 : 48, 50 ; Lyons 1968 : 276 ; Lyons 1995 : 307)^{注13}。そして、差異と類似の内、類似に目を向けると、代名詞類は人称としては同一の文法カテゴリーに属すると考えられることを重用視すれば、1人称代名詞と2人称代名詞だけが deictic 1 に属し、3人称の代名詞だけが deictic 2 であるとは考えにくい。また、3人称代名詞のなかでも *it* が持つ機能、性質が *he*, *she* が持つ機能、性質とかけ離れたものであるとも考えにくいことになる。

そしてもし deictic 1 と deictic 2 とのあいだに構造的な平行性を見出せれば *it* と *that* の交代が可能になるのは不思議なことではなくなる。もし人称代名詞が指示代名詞とあるレベルにおいて平行した使い方がされるのであれば、つまりどちらも近接性に基づいた表現であるならば、人称代名詞も指示代名詞と同じく indexical な表現になっていると考えられる。そして虚字だと考えられている *it* はやはりもともと人称代名詞だと考えるのが自然であろうし、もしそうなら、虚字としてつかわれるようになった *it* も index としての性質を持っているはずである。

そして、*It rains* などにおける *it* は deictic 1 における index であり、*It~that* などの構文における *it* は deictic 2 における index あると想定してもそれほど無理は生じないと考えることができよう。また、個体発生的な観点から考えると人間の言語は初期の段階では displacement (超越性) を十分には獲得していないと考えられるので、つまり、場面依存度が高いと考えられるので、*It rains* における *it* が先で、そこから、あるい

注13 Lyons (1991 : 166) が代名詞の2つの用法—deixis (ダイクシス、直示性) と anaphora (前方照応)—を比べて、発生的にも論理的にも deixis が anaphora に先行する旨を述べているのは注目に値する。

は、後から、*It~that* などの構文における *it* が生まれたと考えるのが自然である (Cf. Bloomfield 1933 : 141)。

また、名詞句とそれを表わしていると思われる代名詞の距離があまりにも離れすぎると、その代名詞がその名詞を (前方照応であれ、後方照応であれ) 文脈指示の意味合いで、差し示しているとは考えにくくなることにも注目すべきである (cf. Wales 1996 : 31—32, 41)。

5.3.2 expletive *it* の派生について

expletive としては使うことができない代名詞の使い方と平行させてまずは考える。

(2) Tom is a student. He studies linguistics. (*he* が *Tom* 以外を指す読みはここでは考えない。以下の例文も同じ。)

(2) の場合は *Tom* と *he* が別の文のなかに属しているが *and* でつなげれば緩やかな同じ1文のなかに属することになる。さらにもっとはっきりとした1文中に *Tom* と *he* を同居させることも可能である。

(3) (?) He studies linguistics, (I mean) Tom. ^{注14}

(4) Tom, he studies linguistics.

このように考えてみると人称代名詞はまさに近接性に基づいて使われているようにみえる。話す場合には時間軸上の近接性、書く場合には空間軸上の近接性となる。

it に関しても同じ様な使い方ができるようである。

注14 この例文以下の英語に関してはカリフォルニア大学パークレー校の大学院生 (日本文学専攻) Gretchen Jones 氏に少し見ていただいた。

- (75) Sunday is a dog. It never barks.
(76) (?) It never barks, Sunday.
(77) Sunday, it never barks.

虚字と一般に呼ばれている *it* に関しても似たような使い方ができるようである。まず(75)と似たような例を考える。

- (78) It was a great nuisance, (break (or pause)) this war.
(79) It was a great nuisance this war. (Kruisinga 1932 ; § 2420)

(79)は(78)より break のない分 *this war* が文中に組み込まれている程度が高いと言えるだろう。さらに *this war* というモノ的表現のところにもうすこしコトよりの表現を代入することが可能である。

- (80) It was a great nuisance the fact that this war happened.^{注15}

ここまでくれば次のように *it* が *that* clause を指す表現まであと一步のところまできていることになる。

- (81) It was a great nuisance that this war happened.

そして実際に(81)は完全に成り立つ表現なのである。(80)、(81)のような表現が成り立てばいわゆる *it...(for)...to do, it...doing*, その他の *it...that* SV のような表現が成り立っても何ら不思議ではない。そして *it* とそれが言及する (*for*)...*to do, doing, that* SV があまりに離れているのはまずいと考えられる。(79)から(81)にかけての文で考えなければならないことは(79)、

注15 Gretchen Jones 氏によると、*the fact that this war happened* の部分はかなり強く *afterthought* だと感じるようである。

(79)は典型的なモノのレベルで、(81)は典型的なコトのレベル、そして(80)は丁度その中間にあたるということである。代名詞は一般に、典型的には何らかの名詞句、つまり、モノを指すことが普通であるので、*it*の場合にもそれがあてはまると考えると、(81)のようなコトの概念を含む表現は(78)、(79)のようなモノの概念を含む表現から拡張されたと考えられなくはない。

次にいわゆる、状況を表わす *it* と形式主語との関係について触れる。つまり、1.4 における a と b との関係ということになる。状況を表わす *it* は基本的に話し手と物理的、心理的に近接性を有する場合にのみ用いられると考えられる。つまり、話し手が状況を表わすとされる *it* を使うときにはあくまでも、自らと *it* で表わされる状況（時間、天候、距離などを含む）とが近接性に基づいて関連性をもつときに（関連性をもっていると感じているときに、関連性をもつと言いたい場合に）限定されると考えられる。これは、外界指示（言語外照応）における近接性に基づいた *it* の使い方である。ひるがえって、いわゆる、形式主語の *it* を考えるとこれは文脈指示（言語内照応）における近接性に基づいていると考えられる。これは代名詞が一般に持つ性質であろう。こう考えると、a と b はまったくちがう使い方ではなく、外界指示、文脈指示の違いはあるにせよ、近接性に基づいているという点では共通性を持ち、そのような共通性に支えられているからこそ、どちらの場合にも *it* を使うことができるのである。そしてそれは代名詞に内在する index としての性質に最終的に依拠しているのである。

さらに代名詞が一般に持つ性質をもう一つ考えると、それはふつう代名詞は前に先行詞をもつということである。この論文での2種類の *it* (1.4 の a と b) は、ともに（普通の）代名詞とは違って、先行詞を持たないようにみえる。しかし、それぞれ同じような先行詞を想定することが可能であるように思われる。状況を表すとされる *it* の先行詞は種々の状況（時間、天候、距離など）であり、形式主語の *it* の先行詞も話者の述べたい種々の状況である。話者が呈示したい状況が先にあり、それを *it* という

代名詞で指していると考えられる。話者が述べたい状況は多かれ小なかれ話者の価値判断を含んでいる。例えば、重要度、困難さ、可能性、役に立つかどうか、規範、感情的反応、想念 (It occurred to me...), 外見 (it seems/appears...) などである (Swan 1980 : 349)。ここでいきなり *it* が使い得るのは、話者と聞き手の間で了解されているモノは言語による先行詞がなくともいきなり定冠詞を伴って出現し得る事実とある程度近いと思われる。

さきほど、述べたことは index としての性質がよりはっきりとしている *this*, *that* の外界指示、文脈指示の使い方と平行している。例えば、以下の例を参照。

② This lollipop is for you, Melvin. (R. Lakoff 1974 : 346)

③ Work and play are both necessary to health ; this gives us rest, and that gives us energy. (小西 1988 : 1748) (=69)

②の *this* は基本的に現実の話し手の目から見て近い lollipop を表わしている。それに対して、③の方は代名詞を使う位置、つまり *this gives us rest.....* の文頭の地点に語り手の視点 (ないしカメラアイ) を置いているといえることができる。 *it* を含む他の代名詞も文脈指示の場合にはその代名詞の地点に語り手の視点 (ないしカメラアイ) を置いているといえることができる。

6. 今後考えたいこと

- 1 — 代名詞が近接性に基づいているということと resumptive pronoun (再叙の代名詞) の発生となにか関係があるのかということ。
- 2 — 言語の個体発生上の変化 : 人の言語は何らかの connection or association をもつ index と icon に始まり、なんの connection or association もない symbol が中枢を占めるようになるという可能性について

て。(有限のもので無限に近いことを表わすにはそのほうが都合がいいのだろうか。)

3 — ところが word の level で考えた場合に index, icon→symbol のあと、再び metalanguage レベルになると index, icon を利用するようみえることの意味すること。

4 — そして word の level ではなく sentence level の記号列では index or icon を使う傾向があることの中味について。たとえば文にするとき、実際に起こった出来事の順に(≒頭の中に浮かんだ順に)言ったり、書いたりすることが自然である。また旧情報→新情報という流れの方がその逆よりも自然であることなどを考えあわせてこれから考察していきたい。

References

- Authier, J.-Mark. 1991. "V-Governed Expletives, Case Theory, and the Projection Principle," *Linguistic Inquiry* 22, 721-740.
- Belletti, Adriana. 1988. "The Case of Unaccusatives," *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Bryant, M. M. 1945. *A Functional English Grammar*. Boston: Heath.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- . 1986. *Knowledge of Language*. New York: Praeger.
- . 1995. "Bare Phrase Structure," in G. Webelhuth (ed.), *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*. Oxford: Blackwell.

- , 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Curme, George O. 1931. *Syntax*. A Grammar of the English Language, Vol. 3. Boston : Heath.
- Haegeman, Liliane. 1994². *Introduction to Government and Binding Theory*. Oxford : Blackwell.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976 *Cohesion in English*. London : Longman.
- Jespersen, Otto. 1909-1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. Heidelberg : Carl Winter. London : George Allen & Unwin. Copenhagen : Ejnar Munksgaard.
- , 1924. *The Philosophy of Grammar*. London : George Allen & Unwin.
- Kruisinga, Etsko. 1909-1911. 1931-1932⁵. *A Handbook of Present-Day English*. 4 vols. Groningen : Noordhoff.
- Lakoff, Robin. 1974. "Remarks on *This* and *That*," CLS 10, 345-356.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Raising and Transparency," *Language* 71, 1-62.
- Lasnik, Howard. 1989. "Case and Expletives : Notes Towards a Parametric Account," ms., Princeton Comparative Syntax Workshop.
- , 1993. "Lectures on Minimalist Syntax," *University of Connecticut Working Papers in Linguistics Occasional Papers Issue 1*.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- , 1995. *Linguistic Semantics : An introduction*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Peirce, Sanders Charles. 1931-1958. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*. Cambridge : Harvard University Press. Rpt., 1965., Charles Hartshorne and Paul Weiss (eds.), Cambridge : The Be-

- lknep Press of Harvard University Press.
- 一. 1940. *The philosophy of Peirce : Selected Writings*. Rpt., 1978., Justus Buchler (ed.), New York : AMS press.
- Postal, Paul M., and Geoffrey K. Pullum. 1988. "Expletive Noun Phrases in Subcategorized Positions," *Linguistic Inquiry* 19, 635-670.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Rothstein, Susan D. 1995. "Pleonastics and the Interpretation of Pronouns," *Linguistic Inquiry* 26, 499-529.
- Milsark, Gary. I. 1974. *Existential Sentences in English*. Ph. D. diss., MIT.
- Safir, Kenneth. 1982. *Syntactic Chains and the Definiteness Effect*. Ph. D. Diss., MIT.
- Silverstein, Michael. 1976. "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description," in Keith H. Basso and Henry A. Selby (eds.), *Meaning in Anthropology*. Albuquerque : University of New Mexico Press.
- Smith, Michael B. 1996. "German Impersonal Constructions and the Nonautonomy of Grammar," paper read at the 23rd Annual University of Wisconsin-Milwaukee Linguistics Symposium.
- Swan, Michael. 1980. *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press.
- Vikner, Sten. 1995. *Verb movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*. New York ; Oxford UP.
- Wales, Katie. 1996. *Personal Pronouns in Present-day English*. Cambridge : Cambridge University Press.

Index (指標記号) としての Expletive (虚字) の *it*

Williams, Edwin. 1984. "There Insertion," *Linguistic Inquiry* 15, 131-153.

Zandvoort, R. W. 1957. *A Handbook of English Grammer*. London : Longman. Rpt., 1975⁷. Tokyo : Maruzen.

Dictionary

小西 友七. (chief editor) 1988. *Genius*. Tokyo : Taishukan.